

タイトル	ドイツ顧問官とスロバキアにおける「ユダヤ人問題の解決」 カタリーナ・フラツカ
著者	木村, 和範; KIMURA, Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集, 71(1): 71-86
発行日	2023-06-30

《翻訳》

ドイツ顧問官とスロバキアにおける 「ユダヤ人問題の解決」*

カタリーナ・フラツカ*

木村和範** (訳)

ザルツブルク会談（1940年7月28日）が終わると、スロバキアの政治、行政、経済の重要ポストにはドイツ人顧問官（複数）（die deutsche Berater）が任命された。それは、括弧付きではあったが主権国家スロバキアへの最も際立った介入の一つであった。このことについて、これまでスロバキアの歴史学はあまり関心を持つことはなかった。論文や研究報告の中で、スロバキアの歴史学者はドイツ顧問官の活動に言及してはいるものの、その支配と影響の複雑なメカニズムを照射するものではなかった。言うなれば、スロバキアでドイツが覇権^{ヘゲモニー}を確立するときに与えた顧問官の影響を大まかに論ずるか、単純化して語るものでしかなかった。

顧問官の任命は、ドイツとスロバキアの元首がザルツブルクで会談する前から準備されていた。ドイツ高官が政治と経済の最重要ポストに就くことをスロバキア側はどのように受け止めたのか。この問いにたいする答えは、

段階を踏んだ分析によってはじめて明らかになる。顧問官がドイツの影響力を貫徹させるための権能を持った監督官としての役割を果たすことは、事前に〔スロバキア側に〕知らされていた。

ドイツ人顧問官の任命と任務の枠組みにたいして、基本的な影響を与えたのは初代スロバキア駐在ドイツ公使〔ハンス・ベルナルト（Hans Bernard）〕である。1940年2月から5月までに〔スロバキアの〕政権と社会の危機に直面したドイツ帝国外務省がベルナルトに依頼して執筆させた『スロバキアにたいするドイツの立場』という文書⁽¹⁾は、スロバキア社会におけるユダヤ人の位置づけに言及している。そこには、はっきりと「ユダヤ人問題は決して解決に近づいてはいない。最も憂慮すべきドイツの敵である彼ら〔ユダヤ人〕は、今なおスロバキアではなくてはならぬ市民と見られているからである。」と書かれている⁽²⁾。ハンス・ベルナルトによれば、〔スロバキアの〕内政と外交は1939年3月に締結した保護条約に沿って発展することはなかったとされるが、先述の報告書にはそのことを取上げた付属文書が付いている。その第

❖ Katarína Hradská, „Der deutsche Berater und die „Lösung der Judenfrage“ in der Slowakei“, *Theresienstädter Studien und Dokumente*, 2002, SS. 300-317. 本稿は、科学プロジェクト「1938年～1945年のスロバキアとその社会。国内外の決定要因」（科学研究 No.2/7243/20）の成果の一部である。〔日本語版の刊行は著者の許諾済み。〕
〔 〕は訳者による。

* スロバキア科学アカデミー歴史研究所

** 本学名誉教授

(1) Im deutschen Original als „Deutsche Feststellungen über die Slowakei“, in: *Akten zur Deutschen Auswärtigen Politik 1918-1945* (fortan ADAP) Serie D (1937-1941), Bd. X., Dok. 205.

(2) *Ebenda*.

4項目は、スロバキアにたいするドイツの要求に直接結びついた任務を実行しやすくするための提案であった。それは、スロバキア側がまったく財政措置をしなくても、[スロバキアの]行政、警察、^{プロパガンダ}宣伝、経済のためにドイツ人顧問官（複数）が派遣されるというものである。その任務は、「影響力の行使と統制を含めて、発展に資するためのあらゆる措置を講ずる」ことであった⁽³⁾。スロバキアの状況にかんするベルナルト・レポートは、当時の二国間の全般的な関係、とくに終わったばかりのザルツブルク会談の影響を受けていた。

1940年7月末、アドルフ・ヒトラー（Adolf Hitler）とヨアヒム・フォン・リッベントロップ（Joachim von Ribbentrop）は、各国（スロバキアの他にルーマニアとハンガリー）の元首を招いて会談し、ドナウ地域の「新秩序（Neuordnung）」問題を議論した⁽⁴⁾。原則的には、これはドイツの支配下にあるドナウ地域の再編成以外の何物でもなかった。ザルツブルク会談の結果としてのスロバキア政府の変容（ザルツブルク協定の履行）は、結局はスロバキアがナチスのやり方を全面的に受容することを意味した。こうして、ドイツの保護下にあったスロバキアは「新たな」独立国として生まれ変わるようになった。しかし、「モデル国家」の時代は終焉を迎えた。スロバキアがその後も存続したということは、ドイツ帝国がドナウ地域の小国（複数）を服従させて、新生ヨーロッパにおける国家社会主

義の尖兵として奉仕させたことを示す証拠となっている。

ザルツブルク会談の翌日（1940年7月29日）になると、もう早ドイツ帝国外務大臣フォン・リッベントロップは、ブラチスラバ（ドイツ名はプレスブルク）にいる新任のスロバキア駐在ドイツ公使マンフレート・フォン・キリンガー（Manfred von Killinger）に連絡して、予定人数の顧問官（複数）のうち一部だけでも速やかに任命する必要があると強く主張した。これは、ザルツブルクでのヴォイテフ・トゥカとの非公式な会談のときにも話題になっていた。

警察、ユダヤ人問題、^{プロパガンダ}宣伝、経済問題、フリンカ警固団〔フリンカ・スロバキア人民党の準軍事組織〕の五分野に5人の顧問官を配置するように提案したリッベントロップは⁽⁵⁾、表向きにはスロバキアが独立国家であることを演出しようとした。そのために、顧問官の配置要請はスロバキア側が行うことにした。ドイツ側はみずからイニシアティブをとって顧問官を押しつけたという印象を与えないことにこだわったのである。ドイツはスロバキアの国家主権を侵害することなく、目立たず、しかし本質的には影響力を強化すべしというのがリッベントロップの考えであった⁽⁶⁾。

ドイツの政界を支配していた考え方は、ス

(3) Beilage des Dokuments „Deutsche Feststellungen gegenüber der Slowakei“, Anlage 2, Berlin 22. VI. 1940. in: *Politisches Archiv Auswärtiges Amt* (fortan PA AA), Bonn, 288103.

(4) Siehe auch: Jürgen Kaiser, *Die Politik des Dritten Reiches gegenüber der Slowakei*, Bochum 1969, S. 348, sowie ADAP Serie D, Bd. X. Dok. 122. ドナウ地域の他の元首との協議については以下を参照。Die Dokumente Nr. 146, 244 und 245.

(5) ADAP, Serie D. Bd. X, Dok. 263. Vergleiche: PA AA, Bonn, Meldungen und Berichte zur Lage in der Slowakei. Inland IIg 448, Nr. 2948. リッベントロップはフシュル（Fuschl: ベルリン郊外にあるフォン・リッベントロップ事務所のコードネーム）から電報を打った。キリンガーが指示の第一報を受けたのは1940年8月1日である。顧問官問題で外相リッベントロップとドイツ大使キリンガーとの仲介役を務めたのは、外務省 [D局長] マルティン・ルター（Martin Luther）であった。

(6) Bericht Martin Bormanns vom 1. Dezember 1939. In: PA AA Bonn. Geheim Slowakei. Bd. 2, R 101 342. Vergleiche Archiv des Innenministeriums der Tschechischen Republik. Bestand Franz Karmasin, 10-P-15/3, sowie ADAP, Serie D, Bd. VII. Dok. 409.

ロバキアの「自治」に介入する場合でも、できるだけ好ましくない影響は及ぼさないようにすべきだというものであった。ドイツ人顧問官の影響は目立たないようにする必要があったが、その実は決定的な影響力を発揮するべしとされた。かつてドイツ公使ベルナルトは、ドイツ人顧問官の人数を臨機応変に変更したいと主張していた。すべての顧問官は、スロバキア駐在ドイツ公使に直属し、外務省の目的遂行上必要な情報を報告するものとされていた。

ザルツブルク会談後にスロバキア政府が「より親独的に」変化したことを受け、1940年8月中旬、ドイツ公使キリンガーは「前向きの作業は手つかずの状態なので、顧問官制度は可及的速やかに導入しなければならない。」とベルリンに報告した⁽⁷⁾。このときドイツ人顧問官の派遣計画には軽微な修正が施されたにすぎない。公使キリンガーの耳には、この作戦全体が近日中に実行されるという情報が入っていたために、その月末には、顧問官に就任予定の役職者の概要を作成した。

ザルツブルク会談でリッベントロップがすでに述べた事柄の他に、[顧問官の所管事項として] 内政、フリンカ青年団、学生問題、社会政策、土地改革、公共事業、鉄道、銀行、林業の九分野が追加された。リッベントロップには、各ポストに誰が予定されているかがすでに知らされていて、ユダヤ人問題担当の顧問官について具体的な情報を入手していた。

9月の初めになると、ドイツの顧問団がベルリンから直接スロバキアに到着した。ベルリンではどのような基準で人選が行われたかを言うのは難しい。だが、多くの場合は、偶然であるか、もしくは帝国保安本部 (Reichssicherheitshauptamt : RSHA) の高官とのコネ

で決められた。専門知識、経験、軍隊の階級、そして意欲などが考慮された場合もある。しかし、その後各部門に配属された顧問官を見ると、専門知識に問題を抱えたり、何らかの欠陥があったりした者も少なからずいた。

トゥカは「顧問官(複数)の」スロバキア赴任に同意したために、各省庁の職員から抵抗を受けることなくすべてがうまく行くはずだった。しかし、第一陣の到着後、予想通りある種の専横によってさらなる顧問団の到着が明らかになった。外務省高官も、「ドイツ側が勝手に気に入った顧問官(複数)を送り込み、スロバキア政府には口を挟む術がなかった」ことを認めている⁽⁸⁾。このために、スロバキア側の部局長の中には、トゥカに直談判をしてコンサルタント業務への配属を見なおそうとした者もいた。彼らによるトゥカへの提案は、顧問官の派遣とその任務についてドイツ公使ハンス・エラルト・ルディン (Hanns Elard Ludin) (マンフレート・フォン・キリンガーの後任) と協議すること、両者が合意した後は個人レベルの覚書を交わすことであった。

この協議を受けてトゥカは、ドイツが顧問官を派遣するときには、あらかじめスロバキアの所管大臣による書面での承認を得るものとするという意見に傾いた。それに基づけば、顧問官はスロバキアの省庁では意思決定権を持たない派遣協力員として職務を遂行し、当該省庁の長からの要請がある場合に限って、専門家の観点から助言を行うものとされている。しかし、この提言は、実務の面から現実的ではないことが分かった。万に一つでもこの提言通りになっていたならば、トゥカはザルツブルクでの非公式会談(前述)における

(7) Berichte über die politische Lage in der Slowakei. In: PA AA Bonn, R 101 344. Vergleiche: Institut für Zeitgeschichte, München, NG 2674; Yad Vashem, Jerusalem, Police d'Israel 1527.

(8) Nach Aussage von Ján Belnay, in: Slovenský národný archív (Slowakisches Nationalarchiv, fortan SNA) Bratislava, Bestand Národný súd (Nationalgericht, fortan NS) Tn I'd 45/49. Hanns Elard Ludin, Mikrofilm 1028.

発言を履行しなかったことになるだろうし、顧問団への全面的な支援を厭わないとする約束を破ることになったであろう。

1939年3月～4月、社会は、スロバキアに住むユダヤ人にたいして公然たる闘いを宣言した。当初、この闘いはユダヤ人の財産に向けられた。財産が「ユダヤ人問題」の重要な契機となったのである。財産をアーリア化[剥奪]されたユダヤ人は経済力を失い零落したために、その存在が社会にとっては深刻な社会問題となった。財力のないユダヤ人には、経済活動に参加する可能性がまったくなくなってしまうからである。

「ユダヤ人問題」の解決は、スロバキアが国としてさらに存続してゆくための条件でもあると次第に理解されるようになった。この問題を解決しなければ、「我々は大ドイツ[1938年の独逸合邦^{アンシュルス}以後、1945年までのドイツ帝国]の最大の敵」と見なされてしまうのではないかと恐れたからである⁽⁹⁾。アレクサンデル・マッハ麾下のフリンカ警固団の中では、久しい前から決めていた決定的な一步を踏み出そうとする機運が熟成していた。こうしてフリンカ警固団は権力に歩み寄り、大望を確認して社会の中で地歩を固めていった。

当然のこととは言え、フリンカ警固団が奮闘したのは、国内が緊張状態にあったからであるが、この緊張は政治的な権力闘争の結果だけでなく、強固な社会的下地があったのである。社会をリードする二大陣営（穏健派のヨゼフ・ティソ (Jozef Tiso) と急進派のヴォイテフ・トゥカ (Vojtech Tuka)、アレクサンデル・マッハ (Alexander Mach) の間でも見解の相違が激しさを増してきて、ユダヤ人

対策とユダヤ人財産を措置する問題は、両陣営にとって何よりも重要な論点になった。

急進派は落ち目になったとは決して認めないだろうが、社会の中で自分たちの地盤が沈下すると、不同意と失望をはっきりと口に出すようになった。その不同意と失望は、スロバキアではユダヤ人が依然として強い立場にあって、比較的的成功している経営の相当部分を所有し、経済に決定的な影響を及ぼしているということに向けられた。このために、自分たちの将来展望とみずからの存在のありようがドイツとの密接な関係の中にあると見ていたトゥカとマッハは、ユダヤ人問題がスロバキアではどの方向を向いて進んでいるのかということ、ドイツから派遣されるトップの者に迅速かつ十分に知らせることが重要だと考えた。

トゥカは、スロバキア在住ドイツ人グループのリーダー (Führer der deutschen Volksgruppe)^[訳注1]としてドイツ国内でも名声が高かったフランツ・カルマシ (Franz Karmasin) と盛んに交流していた。カルマシは、ドイツの指導的政治家の前でもはばかることなく、一再ならず反ユダヤ的な態度を公言し、スロバキアへの顧問官配置構想の誕生に一役買ったが、下は初代ドイツ公使ベルナルトから上は外務大臣リッペントロップに至るまでの政治的なコネがあって初めて、ドイツの政界との交流が可能になったというのが実相である。

1939年12月初旬になると、カルマシは

(9) 1940年5月19日、ルジヨムペロク (Ružomberok) [ブラチスラバの北東約240^{km}] で開かれたフリンカ警固団地区司令官会議で、アレクサンデル・マッハ (Alexander Mach) はこのように述べた。

[訳注1] „Führer der deutschen Volksgruppe“ の „die deutschen Volksgruppe“ とは „Volksdeutsche“ を指す。これはナチス時代の用語でとくに東欧諸国に居住する東方ドイツ人、外国籍ドイツ人の謂。「民族ドイツ人」「他国籍ドイツ人」とも訳されることがある (ドイツ国籍を持って外国に居住する者は „Auslandsdeutsche“ (国外居住ドイツ人))。これにたいして、ドイツとオーストリアに居住するドイツ人は „Reichsdeutsche“ (「本国ドイツ人」) と言われた。

談じ込んでドイツ帝国外相との会談を実現し、スロバキアで非常に活発に活動するユダヤ人集団は断固として排除しなければならないと主張した。これと関連させて考えるところを述べたカルマシンは、ドイツ帝国の高官が顧問官としてスロバキアに赴任するべきだとも主張した。[スロバキアの] 国家機関で働くそのような人物は、その統制によって敵対勢力であるユダヤ人の影響を最小限に抑えるようにしなければならないというのがカルマシンの考えであった。

その後、リップントロップはスロバキア(政府機関と経済界)への顧問団派遣のためのガイドラインを編纂した⁽¹⁰⁾。当然のことだとは思いますが、「ユダヤ人問題」解決のための顧問官については、その到着が最も待たれていた。トゥカ自身が求めていたのは、機に臨み変に応ずる対応ができて、関係方面から信頼されあらゆる面でどのようなことにも能力がある人物であった。

スロバキアにおける「ユダヤ人問題」の専門家として任命されたのは、ディーター・ヴィスリチェニー(Dieter Wisliceny)である⁽¹¹⁾。アドルフ・アイヒマン(Adolf Eichmann)は、最も親密な関係にある協力者の一人ヴィスリチェニーにスロバキアへの赴任を勧めた。こうして、ヴィスリチェニーは「ユダヤ人問題の解決」のためにスロバキア政府顧問官に就任することになった。ヴィスリチェニーは「ユダヤ人問題」のことをよく知っていた。

(10) *Wie Anm.* 6.

(11) ディーター・ヴィスリチェニー(1911年~1948年)。アイヒマンからプラチスラバでの職を提供されたヴィスリチェニーは、東方での立ち退きにかかわる警察事項を所管する第IVA4課[国家保安本部(RSHA)]の配属となった。詳しくは以下を参照。*Katarína Hradská, Pripad Wisliceny. Nacistickí poradcovia a židovská otázka na Slovensku, [The Case of Wisliceny. Nazi Advisers and the Jewish Question in Slovakia.] Bratislava 1999, S. 27f.*

この分野でのそれまでの活動とは、その方向性が異なっていたが⁽¹²⁾、功名心があまりにも強すぎた彼は、躊躇することなく申し出を受け入れたのである。

スロバキアに到着して間もなくの1940年9月1日、スロバキア・ユダヤ人の状況を飲み込んだヴィスリチェニーは、手始めにユダヤ人財産のアーリア化を担当する顧問官に就任したが、この分野についてはドイツでの経験はなかった。ユダヤ人財産のアーリア化を所管する中央経済局(Ústredný hospodársky úrad : ÚHÚ)が設置される10日前に、後にそこの局長に就任するアウグスティン・モラーヴェク(Augustin Morávek)と連れだって、視察のためにプラハとウィーンに出張した。プラハでは、ユダヤ人の移住、ユダヤ人財産の押収、アーリア化事務局の組織構造、[ユダヤ人所有の]家屋の取扱など、様々な問題について知識を得るとともに、ユダヤ人経営の清算、管財人の問題、ユダヤ人の再教育問題についても学んだ。

出張から戻ったモラーヴェクは、ユダヤ人から財産だけでなく、自由をも奪いとることができるようにするために20項目を提言した。彼は、アーリア化関連業務を首相府が集中して担うことを提案した。ユダヤ人は公共事業や公共工事から排除され、ユダヤ人移住基金とアーリア化基金が新設されることになった。さらに、家屋のアーリア化にも可及的速やかに着手することになった。モラーヴェクは、ユダヤ人を見てそれと分かるように黄色い腕章を着用させることも同様に重要視していた。ユダヤ人の手持ち現金は1万ス

(12) ヴィスリチェニーはプラチスラバに向かう前は、ミュンヘンの親衛隊保安本部(Sicherheitsdienst : SD)第A II 111課(海外のフリーメイソン担当)に所属し、ベルリンに異動してからは第A II 112課(ユダヤ人問題担当)に勤務した。短期間ながら、その課長でもあった。

ロバキア・コルナ以下とし、ショッピングは所定の時間内とするというの、彼の考えであった⁽¹³⁾。

中央経済局が設置される前から、ユダヤ人財産のアーリア化と押収の計画を事細かに練り上げて、スロバキア首相ヴェイテフ・トゥカに提案していたモラーヴェクは、中央経済局を創設して、「ユダヤ人をスロバキアの経済と社会から排除し、その私有財産をキリスト教徒の手に移転させるために必要な事柄すべてを措置する」ことができるようになった⁽¹⁴⁾。ヴィスリチェニーが中央経済局に赴任したときには、すでにモラーヴェクはアーリア化計画の全体を管理下に置いていた。中央経済局を束ねる者として、モラーヴェクはスロバキア経済の現況を最もよく掌握しており、彼が言うように、スロバキアはわずかな例外を除けば、ユダヤ人の天下であった。

ウィーンへの出張でヴィスリチェニーとモラーヴェクは、ブラハ・ユダヤ人移住中央事務所と同じようなユダヤ人移住中央事務所を訪問して、アーリア化にかんして細々とした事柄を学んだが、それだけではない。アーリア化関連の具体的な印刷物、命令、法律も入手した。この出張の後、すでにしっかりと方向性をわきまえるばかりか、適切な情報を持つことになったヴィスリチェニーは、いかなる場合であろうともユダヤ人の財産は売却させてはならないと考えるようになった。[ユダヤ人財産は売却の対象ではなく、押収の対象である。]彼によれば、「ユダヤ人問題」は経済問題であり、解決するには方法は一つしかない、それは、ユダヤ人を経済的に破滅させてしまうことだ。こうして、ユダヤ人問題は経済的・社会的問題になり、それを社会が解決するには、どうしても強制移住しかない

だろうということになった。ヴィスリチェニーは証言で曰く、「ユダヤ人から店舗や財産を取り上げてしまえば、ある種の安全弁を見つけなければなりません。これは火を見るよりも明らかなことです。当然のことながら、この安全弁は、大がかりな強制移住ということになります。」⁽¹⁵⁾

ユダヤ人問題の本質にたいするこのような物言いは、ユダヤ人を十把一絡げにして破滅させることに他ならず、したがって、スロバキア国外への強制移住は極めて論理的な結果であったと言えよう⁽¹⁶⁾。「ユダヤ人問題」が即経済問題であるという先述の命題はこのことを言い当てている。こうして、当時のドイツでは支配的であり、スロバキア政権内の急進派が隔々まで行き渡らせようとした反ユダヤ政策の思想的動機が、スロバキアでは後景に退いていった。

このように、スロバキア政府にとっては当初から「ユダヤ人問題」への動機は経済に発するものであり、中でも関心はユダヤ人財産のアーリア化にあった。マイノリティの東方ドイツ人 [Volksdeutsche] の代表であったフランツ・カルマシムもアーリア化を主張した。彼は中央経済局が発足する以前からトゥカに書簡を送り、ユダヤ人財産のアーリア化についてドイツ党 (Deutschen Partei: DP) とフリンカ・スロバキア人民党 (Hlinkas slowakischer Volkspartei: HSES) とは共闘 (Zusammenarbeit) できると申し入れていた。両党の代表はさらに踏み込み、ブラチスラバを除く大管区

(15) ニュルンベルク裁判におけるディーター・ヴィスリチェニーの証言。この引用はスロバキアの歴史学ではしばしば引用されているが、様々な版がある。

(16) Siehe: Eduard Nižňanský, *Deportácie Židov zo Slovenska v roku 1942 a prijatie úisravného zákona č. 688/1942 o vysťahování Židov*, [Deportation of Jews from Slovakia in 1942 and the Adoption of Law No. 688/1942 on the Deportation of Jews.] in: *Studia historica Nitriensa*, X, 2002 (in Druck).

(13) In: *Yad Vashem*, Jerusalem, M/558.

(14) Siehe Slowakisches Gesetzbuch 1940, die Anordnung Nr. 222 über die Schaffung des ÚHÚ.

[最大の地方行政単位] ごとに特別委員会 (Sonderkommission) を設置することで合意した。この委員会の任務は、アーリア化にかんする紛争を解決したり、アーリア化の対象となった経営の担い手を決定したりすることであった。

協議不調の場合には、首相府に設置されたアーリア化特別委員会がカルマシンの提案について判断を下すものとされた。ヴィスリチェニーによれば、中央経済局が発足して以降、モラーヴェクはアーリア化した経営の3分の1をドイツ党に提供することにした。カルマシンはこの提案をはねつけ、ドイツ党が欲しいと思った大企業の名を具体的に挙げて、それを要求した。ヴィスリチェニーは、スロバキアとドイツの合同委員会を創設して、アーリア化をめぐるいがみ合いの解決に腐心した。たとえどのような結末になろうとも、このままでは良い結果にはならないからである。

委員会が暗礁に乗り上げてしまうと、モラーヴェクを能なしだと攻撃し、返す刀でヴィスリチェニーを消極的で協力してくれないと非難したカルマシンは、影響力を発揮して、ハインリッヒ・ヒムラー (Heinrich Himmler) に個人的に面談しモラーヴェクには不満だにご注進に及んだ。その一方で、ヒムラーは、ベルリンに滞在していたカルマシンが、ドイツの派遣した顧問団はドイツ人の利益を十分には擁護してくれないと不満を言っていることを耳にした⁽¹⁷⁾。カルマシンの個人秘

書ルートヴィヒ・ドスタル (Ludwig Dostal) が、中央経済局長モラーヴェクとの間に入ると、事態はいっそうこじれてしまった。ドスタルは、モラーヴェク宛の書簡の中で、モラーヴェクの姿勢がいい加減だからアーリア化でマイノリティのドイツ人が有利になったり不利になったりしていると厳しく非難したからである。これにたいして、モラーヴェクは、彼の言葉で言えば、素っ頓狂な捨て台詞のようなこの書簡を突き返す一方で、ヴィスリチェニーの面前でこの苦情を処理することに同意した⁽¹⁸⁾。

ヴィスリチェニーとしては、中央経済局ではドイツ人の権益のためにモラーヴェクがいつも口を出していると見ていた。とは言うものの、ヴィスリチェニーは [東方] ドイツ人からの圧力に屈することはなかった。10ヶ月以上、中央経済局で働いてみて、ヴィスリチェニーは、アーリア化関連法規は数多くあるが、経済生活からユダヤ人を本当に排除しても、何ら問題はないという結論に達した。ヴィスリチェニーの見解によれば、多くの解決策はスロバキアの内政全般との妥協の産物であった。なお、ヴィスリチェニーは、中央経済局での仕事を通じて近づきになった官僚の中で、スロバキアという国を心から信ずる者はいなかったし、スロバキア政府のやることは正義に叶っていると信ずる者も、誰一人としていなかったと発言している⁽¹⁹⁾。これは奇妙に響く。

モラーヴェクの意見は、ヴィスリチェニーとは異なっていた。1940年6月17日のヴォイテフ・トゥカに宛てた書簡の中で、モラーヴェクは、押収したユダヤ人財産の現物を確

(17) Siehe: Dušan Kováč, *Nemecko a nemecká menšina na Slovensku (1871-1945)*, [Germany and German Minority-Group in Slovakia (1871-1945).] Bratislava 1991, S. 174-175, sowie die Aussage K. Hausknechts vom 24. August 1947 im Prozess gegen Wisliceny. In: Štátny oblastný archív (Staatliches Gebietsarchiv) Bratislava, Bestand Ludový súd (Volksgericht), TK XV 347/48, Dieter Wisliceny, S. 33. これらの資料から分かるように、カルマシンには、顧問団を侮辱すれば、ひいては自分が不利な立場に追い込まれ

てしまうことなど、まったく眼中になかった。後に撤回されはしたものの、ベルリンはドイツ党にも顧問官を一人配置し、ドイツ人の活動を監視することにした。

(18) Yad Vashem, Jerusalem, M-5/33.

(19) BA Berlin, R 70/35.

保するときに無条件に必要なことは、経済生活から排除されたユダヤ人を恒久的でしかるべき管理の下に置き、その相当割合を労働収容所に収容することであると述べている⁽²⁰⁾。

その後、モラーヴェクは、ヴィスリチェニー、エーリッヒ・ゲーベルト (Erich Gebert) (経済・財政問題担当顧問官) の二人の顧問官と協議した。その席でモラーヴェクは初めて、一定数のユダヤ人をポーランド総督府からドイツに集住させて公共事業に当たらせようと発言した。この会合が終わると、二人の顧問官は、モラーヴェクの構想実現に向けて前に進むことにした。モラーヴェクがベルリンに期待していたことは、ユダヤ人の収容を承認することであった。「ユダヤ人問題の解決」がはるかに容易になるからである。

その直後の1941年7月9日と10日に、スロバキアとドイツの視察団がアッパー・シレジアの労働収容所 (ソスノヴィエツ・ゲット) に赴いた。視察団のメンバーは以下のとおりである。参事官イジドル・コス (Izidor Koso), 中央経済局長モラーヴェク, 公証人 (後, 労働収容所政府委員) ユリウス・ペチュフ (Jülius Pečúch), イラヴァ政治犯強制収容所長カロール・クルフニャーク (Karol Krchňák), ドイツ顧問官アルベルト・スマゴン (Albert Smagon), 同ディーター・ヴィスリチェニー。ヴィスリチェニーが評価報告書の中で書いているが、一行は、ドイツ民族性強化帝国委員^[訳注2] 代理のアルト (Arlt)

から、この収容所には9万人のユダヤ人が収容されていることを知らされた。視察団の一行はユダヤ人の生活条件と労働条件を知り、残忍な管理体制が散見されることを知るに及んで、参事官のコスは、「アッパー・シレジアに見られるようなユダヤ人労働の投入システムは、非キリスト教的で非人間的でさえある。スロバキアでは別のやり方を見つけ出さなければならない。」と述べている⁽²¹⁾。

ポーランドから視察団が帰国した直後に、ユダヤ人センター (Ústredna Židov : ÚŽ) の建設部長、工学士アンドレイ・スタイナー (Ing. Andrej Steiner) はスロバキアにも同じような収容所を建設するように命じられた。「コスは、ただちにオレムラーズ (Oremláz) [ブラチスラバの北東約 225^{キロ}] に用地を確保しろと言いました。そこは人間を収容するには劣悪でしたので、私たちはペチューフ (Pečúch) [ブラチスラバの北東約 80^{キロ}] に建設するようにと説得し、それが認められました。時間がありましたので、もっと人道的な収容所を建設しました。」⁽²²⁾ (スタイナー)

1941年秋に行われたブラチスラバからの各地への追放はユダヤ人の大量移送 (「配置換 (Dislokation)」^{がえ}) と言われた) を組織的に実行できる能力があるかどうかを全般的にテストするものであった。この作戦を実行したときの口実は、アリア人が自由に入居できるとされた集合住宅にユダヤ人が住みついているということであった。1941年政令第198

(20) *Ebenda*.

[訳注2] 「ドイツ民族性強化帝国委員」(Reichskommissar für die Festigung deutschen Volkstums : RKF, RKFDV とも) には「ドイツの民族性を強化するための総統兼首相令 (Erlaß des Führers und Reichskanzlers zur Festigung deutschen Volkstums)」(1939年10月7日公布) に基づいて公布日にハインリヒ・ヒムラーが任命された。ドイツ人の移住、ユダヤ人の強制移住にかかわる植民政策全般を所管。本文のアルトとは Dr. Fritz Arlt のこと。

「総統兼首相令」(1939年10月7日) については以下を参照。„Adolf Hitler, Erlaß des Führers und Reichskanzlers zur Festigung deutschen Volkstums (Berlin, 7. Oktober 1939) [Transkript und Scan des Originals]“, in: Europäische Geschichte, <https://www.europa.elio-online.de/quelle/id/q63-28467>, accessed on March 10, 2023.

(21) BA Berlin, R 70132. S. 17-19.

(22) Aussage A. Steiners im Prozess gegen A. Vašek, in: Yad Vashem, Jerusalem, M-5/137.

号「ユダヤ法」の定めにより、ユダヤ人は首都を引き払い、ユダヤ人センター作成の「配置換措置書」に記載された場所へ移動するよう命じられた。この移転は、国その他に雇用された現役公務員、年金生活者、および所定の例外規定に該当する者には課されなかった。

経営主も「配置換」の対象外とされた。有効な労働許可証を持ち、ユダヤ人雇用規程により引き続き従前の職場での雇用が許可された者についても同様であった。強制移住について言えば、ユダヤ人センターの事務局長アルパード・セベスティエーン (Árpád Sebestyén) は、届出に基づき移住するユダヤ人の名簿を15日以内に作成し、移転、給食、宿泊などの計画を立てるとともに、詳細な転居措置を公表するよう命じられた。ブラチスラバを引き払うユダヤ人は1941年末までに移住するものとされた。この影響を受けたユダヤ教信徒は約1万5000人であった。

強制移住の準備と実行を委託されたのは、ユダヤ人センターの特任部であった⁽²³⁾。この移住作戦を迅速かつ円滑に行うために、カール・ホッホベルク (Karol Hochberg) を部長とする特任部が速やかに強制移住対象者のユダヤ人リストを作成した。その上で、特任部はユダヤ人を各移住センターに振分けるなど、強制移住にかんするあらゆる事務や専門知識を必要とする作業などに当たった。特任部の報告書によれば、1941年11月には、14ヶ所の移住センターに全部で6720人が収容された。

スロバキアからのユダヤ人強制移送にかんするエドゥアルド・ニジニャンスキー (Eduard Nizňanský) の研究によれば、ユダヤ人センターを通じて1941年末までにブラチスラバを後にしたのは、6206人 (41.1%) だけであった。ブラチスラバにはまだ8896

人 (58.9%) のユダヤ人が残留していた⁽²⁴⁾。この作戦は全体としてみれば、中央経済局とユダヤ人センターの想定通りには行かなかったが、1942年に強制移送を組織的に実行するときの教訓を得るための包括的な準備と理解することができよう。

この点で、とくに強調しなければならないことがある。それは、強制移住が行われている間中、ドイツ人顧問官ディーター・ヴィスリチェニーが「ユダヤ人センターの」特任部に顔を出していたということである。このときヴィスリチェニーはホッホベルクと盛んに合作の関係 (Zusammenarbeit) を築き上げ、そして、二人の人間関係はスロバキアの国土から占領下ポーランドの強制収容所へのユダヤ人の強制移送で頂点に達した⁽²⁵⁾。戦後になると、この移住作戦についてヴィスリチェニーは、ユダヤ人センターとの合作を否定するどころか、強制移住には「知らぬ存ぜぬ」を通じた。

ところが、ヴィスリチェニーは、1941年10月にはモラーヴェクと一緒に、ユダヤ人2500人の収容を予定するセレッジ・ユダヤ人収容センターを訪問している。ヤド・ヴァシム文書館に所蔵されている無署名レポートには、次のように書かれている。「強制移住と強制収容は慎重に準備され実行に移されるであろう。そして、ユダヤ人は、所轄機関の管理下で有用な仕事に従事し、無為に日々を送ることはないであろう。強制移住の完遂による最終かつ最善の解決を可能ならしめるのは、戦争の終結であろう。」⁽²⁶⁾

1942年3月以降におけるスロバキアの国土からのユダヤ人の強制移送については、ス

(23) Arbeitsplan der Abteilung für Sonderaufgaben 7. 11. 1942, in: Yad Vashem, Jerusalem, M-5/72.

(24) E. Nizňanský, *Deportácie Židov*, [Deportation of Jews.] passim.

(25) Siche Hradská, *Pripad Wisliceny*, [The Case of Wisliceny] S. 46–47.

(26) Yad Vashem, Jerusalem, M-5/72.

ロバキアや国外の一部の歴史学者による研究報告や論文で詳しく取り上げられてきたので、周知の事柄に属す。しかし、「作業部会」[ユダヤ人センター内のユダヤ人救援非合法組織]が1942年10月に強制移送を停止させようとするか、たとえ全面的にはなかったにしても、少しでも強制移送を遅らせようとするかした活動については、あまりよく知られてはいない。

ホロコーストにかんする文献の中には、1942年10月に、知的障がい者も列車に乗せて移送の準備が終わったのに、強制移送が中断されたのはどうしてかということについて、その根拠を述べているものがある。移送中止についての解釈は様々であって、学問の分野ではそれには数多くの原因が示されている。それは、スロバキア政府への国際圧力、バチカンからの抗議、ユダヤ人の救出に当たったブラチスラバの「作業部会」による並々ならぬ奮闘、顧問官ディーター・ヴィスリチェニーへの贈賄、さらにはドイツ軍が初めて大敗を喫したという軍事的政治的な状況全般に至るまで、様々である。しかし、ここで肝に銘じておかなければならないことがある。それは、スロバキア政府が貧困ユダヤ人の問題解決を何は置いても強制移送によって解消しようとしたということである。この問題はスロバキア社会にとって大きな社会問題であり、強制移送によってからくも解決されるべきものとされたからである。

前に述べたニジニャンスキーの研究は、ユダヤ系市民が次第に貧困化したこととそれがもたらした全般的な帰結の両方を全体的に表す統計を引き、強制移送の社会的側面と貧困化との論理的関連を考察したものである。それによってニジニャンスキーは、1942年10月になって強制移送が中止されるようになったのはどうしてかという問いに答えようとした。端的に言えば、強制移送によってユダヤ人の問題が解決されたのである。もう移送す

べき困窮したユダヤ人が一人もいなくなったというわけである⁽²⁷⁾。

ユダヤ人問題担当のドイツ人顧問官ヴィスリチェニーは、早くも1942年6月25日、公使ルディンや他の顧問官の同席の下で首相ヴォイテフ・トゥカと協議したときに、スロバキアにおける「ユダヤ人問題」解決の現況を詳しく報告し、ユダヤ人は5万3000人が移送されたので、移送はほぼ完了したと説明した。ただし、スロバキアの国土にはまだ約3万5000人が留まっていた、その大部分は様々な特別扱いを受けて保護されていた。ヴィスリチェニーは、この特別扱いを見直し、故なく保護されている者への保護打ち切りを提案した。

この協議に基づいて、トゥカはドイツに向けて外交圧力を強め、それを渡りに船とすれば「ユダヤ人問題の解決」が保証される考えた。さらにトゥカは、閣僚会議ですでに特例の取扱にたいする改定が承認されていることも話した。ヴィスリチェニーは強制移送の問題にたいする内務省第14局（局長はアントン・ヴァシェック (Anton Vašek)）の取組を高く評価した。ドイツ公使ルディンは「ユダヤ人問題の解決」の100%達成という目標に賛成すると表明したが、⁽²⁸⁾ この翌日になると、外務省にたいして、残余のユダヤ人をスロバキアから追放することが暗礁に乗り上げていると報告した。教会と賄賂を懐にする官僚のせいで、約3万5000人のユダヤ人が強制移送を免れる身分証明書を所持していたからである。

イギリスの対抗プロパガンダもあって、強

(27) E. Nižňanský, *Deportácie Židov*, [Deportation of Jews,] Anm. 78.

(28) SNA Bratislava, Bestand NS, Tn fud49/4, Hanns Elard Ludin, Karton 22. Siehe auch: Peter Longeric, *Die Ermordung der europäischen Juden. Eine umfassende Dokumentation des Holocaust 1941-1945*, München 1989, S. 302.

制移送はスロバキア国民には評判が悪かった。それにもかかわらず、首相のトゥカは強制移送を続けるつもりでいた。トゥカはスロバキアの現状報告を「この方向で進めるべきかどうかについて、意見を賜りたい。」という言葉で締めた⁽²⁹⁾。さらに進めるべき方向性が示されるのを待つ間、ヴィスリチェニーはアイヒマンと協議するためにベルリンに出張した⁽³⁰⁾。

ドイツ側は、スロバキアが自力でいの一歩にユダヤ人を駆逐したことを評価した。その一方で、強制移送のテンポはドイツの思惑とは違っていた。そのころベルリンでは、スロバキア・ユダヤ人の組織的な強制移送がもたついているという声が大きくなっていった。このために、アイヒマンは、残余のユダヤ人の強制移送を1942年末までに完了させること、それができないならば、最終期限は翌年6月とすると主張した⁽³¹⁾。

当時の公式プロパガンダでは、強制移送されたユダヤ人は働くためにポーランドに行ったと言われていたが、実際は、強制収容所に到着直後にガス殺されていた。ガス殺されていると考えていた人はブラチスラバでは一人もいなかったと史料では一般に言われている。しかし、ユダヤ人センターから生まれた「作業部会」のメンバーであったギゼラ・フライ



図1 ギゼラ・フライシュマノヴァ (1897年～1944年)

シュマノヴァ (Gizela Fleischmannová) [ギジ・フライシュマン (Gizi Fleischmann) とも。] は、ジュネーブのユダヤ人救済組織代表のアブラハム・シルバーシャイン (Abraham Silberschein) に宛てた書簡の中で、すでに1942年7月27日には、ポーランドに移送された成人男女、子ども合わせて6万人がもうこの世の人ではなくなり、それ以外の人たちも助けることができなかったと報告している⁽³²⁾。彼女からの書簡にはこう書かれている。

今年の3月25日以降、60本のアラフィム (Alafim) [移送列車] が出国し、ポーランド総督府に向かった列車もあれば、第三帝国 (東部アッパー・シレジア) に向かった列車もあります。…… 労働に適した男女は労働センターに配属されます。このグループにかんしてはこれと言った情報はありません。…… 60本のアラフィム [移送列車] のうち、2本のアラフィム [移送列車] に乗っていた人

(29) ADAP, Serie E (1942-1945), Bd. III., Dok. 38, S. 65-66.

(30) プレスブルグ [ブラチスラバのドイツ名] のドイツ公使館発外務省宛の電報を参照。[国家保安本部 (RSHA) の] 第IVB4課 [ユダヤ人課, 課長はアイヒマン] のユダヤ人問題顧問官会議に出席のためにヴィスリチェニーはベルリンに出張した。アイヒマンとの会談は1942年8月28日 (Yad Vashem Police d'Israel, 1562)。ヴィスリチェニーはベルリンに発つ前にも、トゥカにスロバキアからのユダヤ人強制移送の推進を提案した。次を参照。SNA Bratislava, Bestand Ministerstvo vnútra (Innenministerium), Karton 703.

(31) ADAP, Serie E (1942-1945), Bd. III. Dok. 38, S. 65-66.

(32) Yad Vashem, Jerusalem, Police d'Israel 142.

写

1942年7月27日

ジルバーシャイン様
ジュネーブ
パキ通り22番地

拝啓

ようやくおたよりを差し上げる機会がやって参りました。この間、私たちがどれほどつらかったか、また過酷な時を過ごしたか、想像してくださるものと拝察いたします。あなた様のお手を煩わすことはしてはいけないと思いますが、それでも、助けを求める声は日増しに高まっております。理由については、いつか個人的にお話したいと考えておりますが、あなた様をはじめとする親しい方々との合作 (Zusammenarbeit) は承認されず、現在までのところ、正式な許可も降りておりません。とは申しましても、事態が緊急性を帯びているとお考えになって、今日のおたよりを前向きにお受け取りくだされば、それはそれで、公式な観点からも合作の基礎ができると思われまます。

今年の3月25日以降、60本のアラフィム (Alafim) [移送列車] が出国し、ポーランド総督府に向かった列車もあれば、第三帝国 (東部アッパー・シレジア) に向かった列車もあります。移送された者は、次の二つのグループに分けられています。

- a) 労働に適した男女は労働センターに配属されます。このグループにかんしてはこれと言った情報はありません。郵送によらないレポートだけが、これらの男女は判定によって重労働に動員されていると伝えています。
- b) 家族グループ。これらの人たちは、労働とは関係がなく、その多くがポーランド総督府ルブリン県に移住させられました。このグループと間の郵便事情はいくぶん弾力的ではありますが、60本のアラフィム [移送列車] のうち、2本のアラフィム [移送列車] に乗っていた人たちの住所しか分かりません。このことを考えますと、一つひとつの救済措置を実行することが、限りなく難しいことがお分かりになるのではないのでしょうか。

手元に届けられるすべてのレポートは、プリティム (Plitim) [難民] の状況がとても悲劇であることをはっきりと示しています。極端に多数の死亡者が出ているとのことでございます。主として純然たる栄養失調のせいです。死亡者が多数出ているということについてですが、プリティム [難民] が小さな村に集団で移住させられ、そこではどの衛生条件にも欠陥があり、初めからあらゆる病気の素が^{もと}できあがっているからなのです。衣服もまた最も深刻な問題の一つであり、どのレポートも一様に、収容者が着の身着のままであることをはっきりと伝えています。そしてまた、医薬品と医師は壊滅的なまでに不足しており、高い死亡率にも得心が行きます。ラザレット号という名の最後の移送列車では、高齢者と病床にある者が連行されました。老人ホームにいた人たち全員、そして移送に適さない人たちも途中の収容施設から連れ出されました。これらの不幸な人々が最終目的地に到着できなかったことは、悲劇でもあり ……

【フライシュマノヴァからジルバーシャインに送られたスロバキア・ユダヤ人の状況にかんする書簡 (付録参照)】

[訳注] Alafim: transports (以下の本文参照) ; Plitim: refugees については、以下を参照。“Navigate to Israel & Middle East section, Israelispeak, Test your knowledge. Take the quiz,” by Shoshana Kordova, in: <https://www.tabletmag.com/sections/israel-middle-east/articles/israelispeak>, accessed on February 27, 2023.

たちの住所しか分かりません⁽³³⁾。

フライシュマノヴァのメッセージは、占領下ポーランドの強制収容所におけるスロバキア・ユダヤ人のむごたらしい末路についての報告としては、最初のものに属している。様々な人脈を持つフライシュマノヴァが、アウシュヴィッツヤルブリンでスロバキア・ユダヤ人は当初は重労働に従事したという情報、それは本当は確実な死を意味するという情報、あるいはガス室で殺害されたという情報、これらを得ていたことは、明らかである。同時に、彼女がこのような情報を自分ひとりで隠し持つようなことはしなかったことも明白である。その情報をジュネーブのナタン・シュヴァルブ (Nathan Schwalb) に送るとともに、「作業部会」とも情報を共有して、強制移送を止めたり、あるいは少なくとも遅らせたりした。

フライシュマノヴァからの情報を得て、ユダヤ人センターや「作業部会」のリーダー(ブラチスラバ)だけでなく、チェコスロバキア亡命政府(ロンドン)や国際連盟チェコスロバキア常任代表のヤロミール・コベツキー (Jaromír Kopecký) (ジュネーブ) はどのように反応したのであろうか。それとも何の反応もしなかったのであろうか。今日までこの問いには、十分に掘り下げた解答は出されていない。コベツキーは、世界ユダヤ人会議 (Jüdischer Weltkongress)、ユダヤ機関 (Jewish Agency)、救援組織ヘハルツ (HeHalutz) [HeChalutz とも。ヘブライ語で「開拓者」の謂。] との合作 (Zusammenarbeit) について、

ある文書 (日付不詳) の中で次のように言っている。

ナチの強制収容所に収容されている我が同胞にかんするニュースが届くと、すかさず私は国際赤十字社代表のフーバー博士 (Huber) と連絡をとりました。スイスに到着したアウグスティン・メルタ (Augustin Merta) は、アウシュヴィッツに収容された我が同胞にかんするかなり膨大な情報を持って来ました。

さらに次のようにも言っている。

1944年春に、私はアウシュヴィッツ強制収容所から、これまでにないくらい詳細な情報を入手しました。……⁽³⁴⁾

こうして見れば、フライシュマノヴァからの情報はコベツキーの手には届かなかったのではないか。彼女の発する情報がとても深刻であったことから見て、[届いていれば] 言及したはずだからである。

フライシュマノヴァがジュネーブに書簡を送ったのとほぼ同じ頃に、ジュネーブ国際赤

(33) Der Brief von G. Fleischmannová an A. Silberschein vom 27. Juli 1942. In: Yad Vashem. Jerusalem M 20/93. Vergleiche Raul Hilberg, *Vernichtung der europäischen Juden*, Frankfurt/Main 1990, Bd. III. S. 1192, Anm. 188. (『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(全2巻) (望田幸男, 原田一美, 井上茂子訳), 柏書房, 1997年。)

(34) Yad Vashem. Jerusalem, M 36/15-5. 1944年春にアウシュヴィッツから最も包括的なレポートを受け取ったとコベツキーが言っているのは、スロバキア出身の収容者 (ヴェツラーとヴルバ) による文書である。二人は、アウシュヴィッツから脱走しスロバキアに戻ってから、絶滅収容所についてのレポートをとりまとめた。[ヴルバとヴェツラーを含む脱走者 (3組5人) によるレポートの原文 (英文) は、Franklin D. Roosevelt Presidential Library and Museum に所蔵されている。これらの文書は、<http://www.fdrlibrary.marist.edu/resources/images/hol/hol00522.pdf>, in: <https://www.fdrlibrary.org/vrba-wetzler-report>, accessed on March 25, 2022 で公開されている。その邦訳は、木村和範訳「アウシュヴィッツにかんする3つの供述書」『経済論集』(北海学園大学), 第70巻第1号, 2022年6月。]

十字社のゲアハルト・リーグナー (Gerhart Riegner) はロンドンに電報を打ち、ユダヤ人がガス室で組織的に殺害されていることを伝えた。この電報には次のようである。

…… ユダヤ人に狙いを定めた兵糧攻め、ゲットー制度、奴隷労働、非人間的環境下での強制移送、さらには組織的大量殺人(銃殺、毒殺など)によって、400万のユダヤ人は完膚なきまでに絶滅の瀬戸際に立たせられている。この全滅政策は、ヒトラーが何度となく繰り返し宣告したところであるが、今やそれは実行に移されている。⁽³⁵⁾

実のところを言えば、フライシュマノヴァの書簡の次に届けられたこのリーグナーの電報(1942年8月8日)は、ヨーロッパ・ユダヤ人の肉体を根絶やしにしようとするナチの計画を伝える最初の史料である。ヨーロッパ・ユダヤ人の強制移送と強制収容所における大量殺戮のことを彼らは本当に知っていたのだろうかと問うときに、多くの人たちが「情報の壁」なるものを口にするが、疑いもなくこの電報はその「情報の壁」を打ち破っている。

(35) Siehe Walter Laqueur, Richard Breitmann, *Der Mann, der das Schweigen brach. Wie die Welt vom Holocaust erfuhr*, Frankfurt/Main, Berlin 1986, S. 141; Näheres siehe Walter Laqueur (Hg.), *The Holocaust Encyclopedia*, Yale University 2001, S. 562-567. Vgl.: Yehuda Bauer, *Freikauf von Juden?* Jüdischer Verlag, o.O. 1996, S. 419, Anm. 49. パウアーによれば、リーグナーが拠り所としている情報は、ドイツの実業家E.シュルテ (E. Schulte) から得たとのことである。さらにまた、パウアーはこうも言っている。スイス駐在ポーランド領事館に勤務するユダヤ人職員から大量殺戮のことを聞いていたので、サリー・マイヤーは1942年8月15日にはそのことを知っていたと。しかしながら、これらの情報の出所は書かれてはいない。

フライシュマノヴァがジュネーブに送ったその他の書簡、ナタン・シュヴァルブ宛の書簡、サリー・マイヤー (Saly Mayer) 宛の書簡、あるいは上で取り上げたジルバーシャイン宛の書簡、これらのどれをとっても、その基調は同じである。強制収容所への移送を目前にしたスロバキア・ユダヤ人の救出にたいして「作業部会」が組織的に取り組むときに、いかによく成し遂げたかということは、これらの書簡からよく分かる。

フライシュマノヴァと「作業部会」の他のメンバーにとって百も承知だったことは、強制移送をさらに防ぐにはヴィスリチェニーとの合作 (Zusammenarbeit) しかないということであった。ドイツ公使館の高官、とりわけスロバキア政府に派遣された顧問官と交わりを結ぶようにしておけば、そのつながりを利用できるだろうと考えていた。それは当然のことであった。その考えが間違っていなかったことは、明らかになっている。

問題は、その結果もたらされた合作が誰のためになったかということである。かたや、ヴィスリチェニーは長い時間を掛けて、ユダヤ人センターからスロバキアのユダヤ人コミュニティの状況にかんする情報を掴んでいた。こなた、ユダヤ人自身とは言えば、ヴィスリチェニーを買収するために必死になってかき集めた虎の子のドルを使って、これ以上の強制移送は阻止したいと望んでいた。ヴィスリチェニーは、残されたスロバキア・ユダヤ人を救うために [フライシュマノヴァたちの書いた] シナリオの中で一役を担ったわけである。

フライシュマノヴァは、サリー・マイヤーやナタン・シュヴァルブと絶えず連絡を取り合い、金銭を要求して、それでスロバキアの労働収容所の維持資金をまかなおうとした。その一方で、その金銭はヴィスリチェニーへの賄賂として使われ、買収されたヴィスリチェニーは強制移送を阻止するために権力の

最上層への口利きを約束したのである⁽³⁶⁾。

フライシュマノヴァがスイスに向けて送った書簡と、サリー・マイヤーやナタン・シュヴァルプからの返信は、今後私が時間を掛けて取り組もうとしている研究対象である。その研究については、何千人ものユダヤ人を救済した汚職をはじめとするあらゆる事柄を取り扱わねばならず、そのテーマの複雑さを私は認識している。それだけでなく、かくも膨

大な書簡のコレクションを復元し、歴史的紐帯を参酌して年代順に整理するというこれまでにない可能性が開かれるということも認識している。こうすることによって、ユダヤ人センターとその傘下にあった「作業部会」の、最も困難な時期（スロバキア・ユダヤ人の救済にあらん限りの力が振り絞られた時期）の活動にかんする複雑な心象を描き上げることができる。

(36) 1942年7月27日付のフライシュマノヴァからナタン・シュヴァルプ宛の書簡を参照。この書簡には、スロバキア・ユダヤ人の救出に必要な資金を調達するために、具体的に金額を特定して要求している。フライシュマノヴァは、このシナリオに登場する人物の中に、「作業部会」が賄賂で密接な関係を築いていたヴィスリチェニーも入れている。これらはすべて、強制移送を遅らせるか、中止させるかを期待したからであった。Yad Vashem, Jerusalem. K. Hradská, *Pripad Wisliceny*, [The Case of Wisliceny], pp. 50-51.

【付録】

O p i s .

Wohlg. Herrn
Dr. Silberschein
Geneve,
rue des Paquis 23.

27. Juli 1942.

Sehr geehrter Herr Doktor!

Endlich habe ich die Möglichkeit Ihnen zu schreiben. Sie können sich vorstellen, wie schwer es mir war, in dieser für uns so harten Zeit. Ihre Hilfsbereitschaft nicht in Anspruch nehmen zu können, umso mehr, da jeden Tag erhöhte Hilfe forderte. Aus Gründen, die ich hoffentlich Ihnen einmal persönlich werde bekannt geben können, war mir die Zusammenarbeit mit Ihnen und den übrigen Freunden nicht gestattet und ist auch bis zur Stunde eine offizielle Genehmigung nicht vorhanden, doch es ist anzunehmen, dass dies baldigst der Fall sein wird, umso mehr, wenn mein heutiges Schreiben Ihrerseits in positivem Sinne erledigt wird, es dürfte die Basis sein einer Zusammenarbeit auch vom offiziellen Standpunkte aus.

seit dem 25.3. dsJhs haben 60 Alafim das Land verlassen und sind teilweise in Generalgouvernement und teilweise im Reich / Ostoberschlesien/ angesiedelt worden. Die Angesiedelten gruppieren sich in zwei Teile:

- a/ arbeitsfähigen Männer und Frauen werden in Arbeitszentren eingeordnet und ist gerade von diesen Gruppen keinerlei Nachricht vorhanden. Nur Berichte, die uns nicht auf postalischen Wege erreichen, sagen uns, dass diese Männer und Frauen je nach ihrer Qualifikation zum schweren Arbeitsdienst herangezogen sind,
- b/ Familiengruppen, also jene Kategorie, die für die Arbeit nicht in Betracht kommen und vorwiegend in Generalgouvernement im Distrikt Lublin angesiedelt werden. Die postalische Verbindung mit dieser Gruppe ist etwas elastischer, doch wenn wir in Betracht ziehen, dass von 60 Alafim, wir lediglich von 2 Alafim die Adressen haben, können Sie sich vorstellen, wie unendlich schwer es ist, die individuellen Hilfemaßnahmen durchzuführen.

Sämtliche Berichte, die uns erreichen, geben ein eindeutiges Bild, dass die Lage der Plitza eine sehr tragische ist. Wir sind informiert, dass eine unverhältnismäßig hohe Anzahl von Todesfällen zu verzeichnen ist, was vor allem die Folge der absoluten Unterernährung ist. Dazu trägt noch bei, dass die Plitza in den kleinen Dörfern massenhaft angesiedelt werden und infolge jeden Mangels an hygienischen Voraussetzungen schon von vornherein die Basis aller Erkrankungen gegeben ist. Eines der schwierigsten Probleme bildet auch die Bekleidung, da sämtliche Informationen eindeutig darauf hinweisen, dass die Menschen lediglich nur das besitzen, was sie am Leibe haben. Als weiterer katastrophaler Umstand bildet jeden Mangel an Medikamenten, wie auch der Ärzte selbst, und so ist es begreiflich, dass die Mortalität eine unverhältnismäßig hohe ist. In den letzten Transporten, die auch den Namen Lazarett-Transporte hatten, wurden Greise und Sieche mitgenommen, d.h. sämtliche Altersheime wie auch transportunfähige wurden aus den Spitälern auf den Weg gebracht. So tragisch es auch klingt, dass diese Unglücklichen das Endziel nicht erreichen

Bericht von G. Fleischmannová an A. Silberschein über die Situation der Juden in der Slowakei.